

第 20 回「人生用心ノート（二）」

孔子が説いた戒め。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 20 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

株式会社フジテレビ KIDS 東京都港区台場 2-4-8

今回は「人生用心ノート」の第二回をお話しします。

『論語』の中には、知恵になる多くのことばがあります。そのいくつかをお話しします。

「子曰く、^{しいわ}貧^{ひん}にして^{うら}怨^なむ無^{かた}きは、^と難^{おご}し。富^なみて^{やす}驕^{やす}る無^{やす}きは、易^{やす}し」(憲問第十四)

『論語』のことばは対句、ペアになっていることが多いのです。これもそうです。

「貧にして」に対して「富みて」。「怨む無きは」に対して「驕る無きは」。「難し」に対して「易し」。

こういう対句は覚えやすい。

最初に申しましたように、なにしろことばを聞いて、議論していた時代でしたから、このよう

に対句的に表現することが相手に対して、わかりやすく、強みにもなります。

「貧にして怨む無きは、難し」貧しくても、怨まない。文句言わない、運命や社会に対して文句を付けないのは、難しい。貧しいことがほとんどの時代です。文句言うのは当たり前です。

しかし孔子はそここのところだと言います。貧しいからといって、社会や運命を怨む、文句を言う、それでいいのか、ということばです。

そのことばの背後にあるのは、お前の生活が幸せだったら、いいじゃないかと。貧しくても幸せな生活をしている人はいるわけです。豊かであっても、心の落ち着かない、平和でない生活をしている人もいます。これは人間の心の在り方ひとつで決まる。貧しいからと言って、文句を言う、幸せではないというのは、ちょっと違うのではないかと、ということでもあります。

孔子は、わりにそういうことばを残しています。

自分が生活をしていることに楽しみを持って、仲良く暮らしているならば、それでいいじゃないか、と。しかし人間はともすれば、人と比較をして、羨んだりするということになります。

貧しさに対して文句をつけるということになりやすいのです。

「富みて驕る無きは、易し」裕福であると、傲岸不遜になりやすいというところはあるかもしれませんが、驕り高ぶるということを抑えて、生活していこうとする、これは易しい、できると言っています。余裕があるからでしょうね。

日本にも有名なことわざがあります。「金持ち、喧嘩せず」はそういうことです。

「貧しさ」と「豊かさ」は常にある問題で、常にそれが問題を起こしていく原因にもなっています。しかし、多くの人間が生きていて、すべての人間が豊かになるというのは、まず考えられません。多くの人は普通の生活、ひとことで言えば貧しい生活です。

貧しいということばを、とてもいけないことばであるかのように言うのは、それは違う、というのが孔子の意見です。そして多くの人間は、自分の生活を守ればいいのに、社会に対して不平不満を言う、そこが残念だということばであります。

「しる きみ つか と しいわ あざむ なか しか これ いき
子路 君に事うるを問う。子曰く、欺くこと勿れ。而して之を犯めよ、と」(憲問第十四)

子路は、孔子の弟子の中でも、第一期の弟子で、年齢は(孔子と)あまり変わらなかったようです。子路には、面白いエピソードがいくつもあります。子路は、今風に言いますと、暴れまわっていたような人間でした。姿勢好も普通の人間とは違うような。

あるときに子路は、孔子という人物のところにみんなが集まって勉強しているという話を聞きました。面白くなく思い、文句を言ってやると乗り込んでいったのです。殴り込みです。

しかし、頭は単純だったようで、孔子に簡単に言い負かされてしまいました。

言い負かされながらも、孔子に何かしら魅力を感じ、子路は即座に弟子入りしました。

以後、子路は一生、孔子と運命を共にしていきます。子路は武闘派でありますから、用心棒のような存在でもあったのでしょう。

孔子は言いました。日本のことばで言いますと、子路は「畳の上で死ねないだろうな」と。

事実、子路は戦いに巻き込まれて、命を落としました。彼はいわゆるやんちゃな人だったのですけれども、一生、孔子についていった、そういう人です。

この子路が、孔子の推薦で、あるポストを得ました。そして子路は主君への仕え方を聞きました。孔子は「欺くこと勿れ」真心を尽くせと言いました。子路の性格をよく知っていたから、このことばを言ったのでしょう。難しいことはなかなか理解できません。

その次が重要です。「而して之を犯めよ」「犯罪」の「犯」を使っていますが、諫めるということで、これは古代の使い方です。主君がまちがっているときは、それを諫めよ、と言いました。真心を持って諫めよ。主君と生活を共にしますと、良いことばかりではありません。悪いこともある。そのときは諫める必要があります。その場合、諫め方に真心があるかどうかで、効果が違って来る。こういうことです。

子路は性格が単純な人でしたので、このように簡単なことばで、人生の在り方、主君への仕え方を教えたのです。

真心を尽くすことは大事なことです。真心を尽くせば、その人のことばは重みを持ちます。

「子曰く、躬しいわ自みみずから厚あつくして、薄うすく人ひとを責せむれば、則すなわち怨うらみに遠とおざかる」(衛霊公第十五)

孔子のことばです。自分自身の方、自己側の責任を厚くする、厳しくする。しかし、人の責任は強く求めない。そういう生き方、自分の責任は厚くし、人の責任は薄くする。そうすれば、「則ち怨みに遠ざかる」他人からの恨みに遠ざかる。他人から怨まれることはない。そういう意味です。

責任を取る場合、大体、人に押し付ける。それではだめだと言っています。自分の責任を重くしなさい、と。これも、当時の孔子の、ある事情から言っています。孔子の学校の学生は全員と言っていいほど、政治家志望です。そうすると常に責任が伴う仕事が多くなります。その責

任の在り方について、孔子は厳しく言ったわけです。

前に読みましたように、誤ったら、「^{かぎ}文る」。あれこれと言ひ訳をして、ことばを飾り、責任を逃れようとする、そのようなことをしてはならない。それと同じ意味です。

「^{しいわ}子曰く、^や己むんぬるかな、^{われいま}吾未だ^よ能く^そ其の^{あやま}過ち^みを見て、^{みずか}うちに^せ自ら^{もの}訟むる^み者を見ざるなり」

“^{じしょう}自訟”（雍也第六）

孔子は次のようにおっしゃった。「己むんぬるかな」ああ、もうどうしようもないな。

次の文、「吾……見ざるなり」という文の形。見たことがない、という意味です。

何を見たことがないのか、「未だ能く其の過ちを見て、うちに自ら訟むる者」過ちを見て、ああ、失敗だったなあと気が付いた後、その責任は自分にあるとして、自らを責める者を。

これを「^{じしょう}自訟」と言います。

自己責任を追及することができる者をこれまで見たことがない、と言いました。みんな、人のせいにして逃げてしまう。それを厳しく諫めることばです。

「自訟」これは他人を訴えるわけではなく、自らの心に訴えるということです。

このように自己責任について言うことは、孔子の時代からあり、重要なことであったということばです。

次、これは物語として少し長い文です。

「^{しか}子夏、^{きよほ}莒父の^{さい}宰と^な為り、^{まつりごと}政を^と問う。^{しいわ}子曰く、^{すみ}速やかならん^{ほっ}ことを^な欲する無かれ。

^{しょうり}小利を見ること^な無かれ。^{すみ}速やかならん^{ほっ}と欲すれば^{すなわ}則ち^{たっ}達せず。

^{しょうり}小利を見れば、^{すなわ}則ち^{だいじな}大事成らず、と」（子路第十三）

子夏は、孔子の第三期の弟子で、秀才でした。この子夏が孔子の教えを後世に伝えていって、

孔子の思想の流れができていくという重要な人物です。

子夏が「莒父の宰と為り、政を問う」莒父という土地の宰相、長官となりました。たぶん赴任前でしょう。

孔子にどのように政事をしたらいいのでしょうかと訊ねた。孔子はこのように答えた。

「速やかならんことを欲する無かれ。小利を見ること無かれ」結果を早く出そうとしない。子夏は秀才でしたから、秀才にありがちですが、早く結果を出そうという気持ちになるだろうと、孔子は危うさを感じていたのですね。

相手の性格を見て、このように孔子は言ったのです。

「小利を見ること無かれ。速やかならんと欲すれば則ち達せず。小利を見れば、則ち大事成らず、と」ちょっとした利益に引きずられてはいけない。政事はみんなのためですから、小さな利益に引きずられてはいけない。全体の幸せでなくてならない、ということです。

最後にまとめています。早く功績を挙げたがってはならない。見せたがってはならない。それでは大事なところには到達しない。大目的を達することはできないぞ。大事業は完成しない。ゆっくりと大きな目的に向かっていくことだと言っています。

このように『論語』には、その経緯がわかるところがあります。孔子がなぜそう言ったのかがわかります。一般論ではなく、個別に言っています。現実性があります。

孔子と弟子との深いつながりを見ることができます。

今回は、「人生用心ノート」の第二回をお話ししました。